

歴史を楽しむ野老会 西所沢～下山口（4月19日） コース資料

今回は旗本の墓がある 瑞岩寺、永源寺、長久寺を訪れる予定だったので、所沢の旗本について調べたことを参考資料として最後にまとめました。（永源寺、長久寺は別の機会に）

1. 小手指火車站創設之碑（小手指列車駅創設之碑）

武蔵野鉄道は大正4年（1915）池袋－飯能間の西武池袋線を開業した。正平7年（1352）に新田と足利が戦った小手指ヶ原古戦場にちなんで、ここは小手指駅と呼ばれたが開業から、3年後西所沢に改称された。この、記念碑は大正8年に建てられた。

参考資料：所沢市域駅名変遷*1参照

2. 三山百箇所供養塔：文政11年(1828)

出羽三山（出羽山、羽黒山、湯殿山）と西国三十三所、坂東三十三所、秩父三十四所の百観音廻りを行ったことを記念して建てられたもの。

3. 道標：嘉永2年(1849) 昭和30年修理再建

右/三ヶ嶋 青梅道
坂東第一北野天満宮
左/従是 北野一七丁

(1丁=60間=108m 17丁≒1.8km)

この道は青梅から江戸へ向かう江戸道

| 小手指火車站創設之碑 | |
|------------|---|
| 大正八年歲次己未四月 | 西所澤舊紀所謂小手指原而正平七年以新田足利打仗之地其名炳乎史上茲地西進青梅及五日市北接飯能入間川越等平野遠關阡陌旁午顧以交通便否可卜其薩替也大正二年武蔵野鐵路公司起工於東京池袋將達埼玉縣飯能町而其軌道貫通小手指邨者里餘惟以此地接隣所澤驛不頓火車站村人深慨後來之盛衰釀貨損地相商以設置車站公司亦屬望乎後日之昌賑終至置車站村人等欲傳其事于後昆屬余為文樹碑記之 |
| 滑川達讓弁書 | 正三位伯爵宗重壘篆額 |
| 小泉藤芳鐫 | |

4. 普門院

上洗山普門院、真言宗豊山派で本尊は不動明王。なお、観音霊場の札所の本尊は千手観音。

開創は天平宝字年間(757~64)、弘法大師巡錫の際に三ツ井戸を加持祈念した。その時不動明王を彫り、安置したと伝えられている。元来西所沢町の東川のほとりにあったものを、寛文年間(1660~72)に、現在の地に移された。 上洗山：かみあらい：上新井

古くは六所神社の参道近くに池があった。帯解のお祝いなどでお参りするとき、その清水で髪を洗ってから参拝したので髪洗いと言って趣のあるところだった。それが上新井と呼ばれるようになった。（越阪部三郎さん 談）

(1)武蔵野三十三観音霊場、狭山三十三観音霊場

| 所沢市の武蔵野三十三観音 |
|---------------|
| 9番：實藏院 |
| 10番：新光寺 |
| 11番：普門院 |
| 12番：全徳寺 |
| 13番：金乗院（山口観音） |
| 14番：妙善院 |
| 15番：松林寺 |

| 所沢市の狭山三十三観音 | 6番：瑞岩寺 |
|--------------|---------|
| 1番：金乗院（山口観音） | 7番：普門院 |
| 2番：佛藏院 | 8番：新光寺 |
| 3番：六斎堂 | 31番：聴松軒 |
| 4番：正智庵 | 32番：慈眼庵 |
| 5番：勝光寺 | 33番：妙善院 |

松林寺、正智庵、聴松軒はまだ行っていない。勝光寺は今日これから。

(2)普門院の石造物

「西」（不明碑）天保3年(1832) 「北田園」から移設されたもの。書かれている内容不明。

聖徳太子 宝暦2年（1752） 建造 聖徳太子講中 35人

馬頭観音 明治17年(1884)

弁財天 宝暦2年(1752)

奥多摩新四国八十八ヶ所第七十二番札所（昭和9年） 右：大日如来、左：弘法大師

馬頭観音像(三面六臂) 安永2年(1773) ……次ページに馬頭観音の説明

六地藏 文政4年(1821) 台石は平成7年

等

(3)鹿島岩吉（墓地に鹿島家の墓があったので、関連して）

鹿島建設の創業者である鹿島岩吉は文化 13 年（1816）に小手指村上新井で生まれ、東京四谷で大工の修行をした後に、天保 11 年（1840）、「大岩」という屋号で京橋に店を構えた。

岩吉の子岩蔵が初代鹿島組（後の鹿島建設）組長。



5. 岩崎弁財天

傍を六ツ家（むつげ）川（柳瀬川の支流）が流れる。

左の写真は田淵さんお薦めの弁天池のサクラ（3/29 撮影）です。

6. 路傍の石造物

- ・馬頭観音（岩崎弁天池東）：天保 14 年（1843）武砦入間郡岩崎村中
- ・庚申塔（山口 703）：正徳 3 年（1713）小峰宅 祠堂入り
- ・庚申塔（山口 391）：天明 6 年（1786）武州入間郡岩崎村 ショケラを持つ
- ・三山供養塔（山口 391）：文政 12 年（1829）武州入間郡岩崎邑

馬頭観音：観世音菩薩はあまねく衆生を救うために相手に応じて変身すると説かれている。

馬頭観音は頭に馬を乗せてにらみつけるような忿怒相をしているが、これは馬のごとく四方を駆け巡り、魔を蹴散らし承伏し、あらゆる重症を食べ尽くしてくれることを表している。忿怒相をしているため馬頭明王とも称される。また、馬頭観音は六観音の一つで、畜生道にいる者を救うために配される。

江戸時代後半になると、馬の供養を目的に、個人や牛馬に関係のある職業の人達の講集団によって供養塔が造立されるようにもなる。祀られる場所は、交通の難所、道の辻、村の境、屋敷内などである。文字塔もあり、所沢市内に 115 を超える馬頭観音を祀る石造物があり、地蔵菩薩に次いで多い。

庚申塔：庚申塔については学びの記録 P66 の戸村さんの書かれた「庚申塔」を参照のこと。

祀られる場所は主に道の辻や村の境などであり、所沢市内では 71 基あり、そのうちの 14 基（戸村さん発表原稿より）がショケラを持っている。

7. 山口城主の菩提寺である瑞岩寺

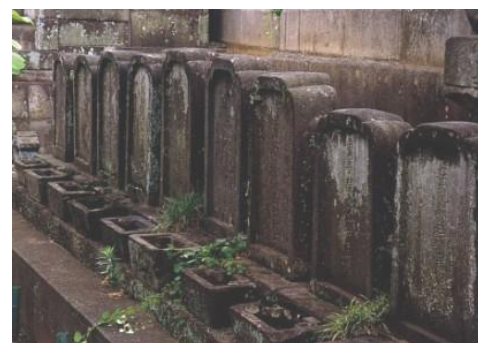
祥雲山瑞岩寺：曹洞宗、本尊：十一面観世音菩薩

瑞岩寺は山口氏により室町時代初期に創建された寺。墓地内には、山口氏三代の墓とされる三基の五輪塔・宝篋印塔（市文化財）が安置されている。この石塔のうち、向かって左側のものは永徳 3 年（1383）の年号が刻まれており、足利氏満と戦って戦死した山口高実の供養墓とみなされている。またこちらには**岩崎獅子舞**（市文化財）という伝統芸能が伝わっている。これは、慶長 19 年（1614）に当地の地頭であった**宇佐美助右衛門**が大坂冬の陣の帰途に京都で求めたという 3 頭の獅子頭を用いて始まったという行事で、現在では毎年 10 月第 2 土曜日に行われている。



・**旗本宇佐美氏の墓** ところざわ歴史物語では右の写真が宇佐美氏の墓となっているが、市史では久貝氏の墓となっている。また新編ところざわ史話では右端の墓が宇佐美助右衛門の墓となっている。

右端の墓は慶長 20 年（1615）、以下順に慶安三（1650）、元和五（1619）、慶安元（1648）、承応元（1652）、明暦三（1657）、寛文九（1669）、延宝六（1678）、正徳四（1714）の年号だ。



宇佐美助右衛門は 1615 年に亡くなっており、その後岩崎は久貝氏の知行地になっているので、右端が宇佐美助右衛門その他は久貝氏の墓ではないだろうか。

・六地藏：元禄元年(1688) 武州山口郷岩崎村

六道輪廻の思想により死後は六道の世界（天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄）に生まれ変わりを繰り返すと言われ、六道のそれぞれに、地藏がいて人々を救い、悟りを得させる事から六地藏と言われます。他界への旅立ちの場である葬儀場や墓地の入り口などに多く建てられています。

向かって右から 宝珠・錫杖、幡、天蓋、合掌、香炉、銅拍子

であるが、天上界、人間界等との対応は一定でなく分からない。(学びの記録 P63 竹本さんの六地藏参照)

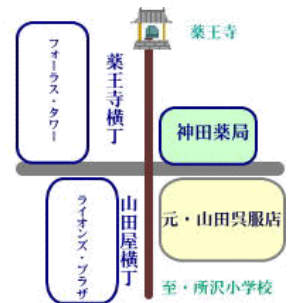
・瑞岩寺の墓を見てみよう

山田力蔵：初代 文久 2～大正 2 (1862～1913)

山田呉服店（写真）を経営：明治 24 年に創業、時代の先端を行く日用雑貨も取り扱う所沢で最初のデパートとして賑わいました。

東京の五大呉服店と同じ店より仕入れる地方店はここだけであったと言われています。

2 代目山田力蔵は明治 34 年生まれ、早稲田大学を卒業後所沢実業校（現在の所沢高校）に英語教師として採用されました。その後、「山田呉服店」を経営しながら、戦後は町長に就任。温厚篤実な学者町長として町民から慕われていました。その後も所沢市教育委員長、所沢商工会議所会頭を歴任。昭和 38 年 62 歳でその生涯を終えるまで、市勢の振興に力を注ぎました。



図と写真はホームページ [ところざわふるさと散歩](#) より

山田裕通：山田うどん 創業者、商工会議所会頭等

この他山田姓の古い墓が多く見られたが、久米村は旗本山田氏の知行地であり、その子孫か？

下田佐重：東村山市、所沢市教育委員長を歴任、「郷土あずま」「所沢市の民俗回顧」等の著作あり。その子博之氏（農工大名誉教授）にところ学の講座で「農耕文化と狭山茶のブランド化」と題する講義を受けた。

8. 路傍の石造物

石橋供養塔 寛政 8 (1796)年 山口 581 番地 六ツ家橋脇

9. 仏蔵院（勝楽寺）

山口貯水池の湖底に沈んだかつての勝楽寺村の中央に位置したこの寺は現在地に移されました。

学びの記録 P62 神澤さんの書かれた佛蔵院（勝楽寺）を参照下さい。

【2 年次 所沢の歴史 G の資料より】

勝楽寺村(予備知識)

真言宗辰爾山仏蔵院勝楽寺の名を取った勝楽寺村及び堀口村は東京の水がめとして造られた山口貯水池の湖底に没しました。そこには、山口村大字勝楽寺村と大字上山口といい、勝楽寺は、刈谷戸、神門、北入、中笠と大笠、上山口の堀口と、六つの集落により構成されていました。

狭山丘陵の谷の奥まった所に広がり、自然に満ち、所沢から青梅、八王子へ通じる道路が貫いていました。明治時代、所沢の織物が隆盛をみた頃はこの地域の村人達を中心となり「所沢緋：飛白」を生産していました。しかしこの地域は昭和 7 年、増え続ける東京市民の水がめとして建設された貯水池の湖底に没してしまいました。湖底に沈むことになり、そこに住む人々は移転を余儀なくされました。

移転した数は 282 戸、家族全体の人数は 1720 余名、大部分の 190 戸が農業で、次が織物業 20 戸でした。所沢緋の衰退の要因の一つにあげられます。(所沢ふるさと散歩より抜粋)

仏蔵院(勝楽寺):元は勝楽寺村にあった。現在は勝楽寺と呼ばずに通常仏蔵院と言われている

草創は 716 年朝鮮から渡来した王辰爾一族が勝楽寺聖天院を建立した時にはじまる。その後弘法大師と伝えられる僧により薬師如来・蔵王権現が刻まれ辰爾山仏蔵院として再興、武蔵野一の霊場となった。その後頼朝の祈願所となって十二社十二坊を数え社寺とも繁栄した。

その後廃墟になり、また復興されました。明治維新により寺社は分離され、その後の山口貯水池の建設にともない、神社は中氷川神社に合祀され、寺院は現地に移されました。
境内には勝楽寺村にあった馬頭観音等の石造物が多くあります。
仏蔵院の杉戸絵は石川文松*1の作で所沢指定文化財に指定されています。（見られません）

*1 いしかわぶんしょう石川文松は、寛政 10 年（1798）青梅に生まれ、絵を谷文晁学びました。晩年は、勝楽寺村や三ヶ島村で絵師として生活を送り、安政 5 年(1857 年)に亡くなり、妙善院に葬られた。

佛蔵院にあるこの石造物は勝軍地蔵で、戦に勝ち、宿業飢饉を逃れると言われており、良く馬に乗った姿が描かれています。また、愛宕権現とも言われます。

本地垂迹（ほんじすいじゃく）とは、神仏習合思想の一つで、日本の八百万の神々は、実は様々な仏（菩薩や天部なども含む）が化身として日本の地に現れた**権現**であるとする考えである。

よって仏教の勝軍地蔵は神道の愛宕権現と同じものなのです。



佛蔵院の石造物

| | |
|---------------|---------------|
| 勝軍地蔵 | 延享 4 年（1747） |
| 馬頭尊 | 安政 4 年（1857） |
| 百番三山供養塔 | 文政 8 年（1825） |
| 百番供養塔 | 天明 8 年(1788) |
| 大乘妙典六十六部回国供養塔 | 享保 17 年（1732） |
| 百番三山供養塔 | 安政 2 年（1855） |
| 馬頭明王 | 文久 2 年（1862） |
| 馬頭観世音 | 文化 8 年（1811） |

10. 来迎寺

来迎寺は大光山無量寿院といい、鎌倉時代初期に創立されたと考えられ、本尊は阿弥陀三尊である。

この阿弥陀様にまつわる民話「車返しの弥陀」、「行脚の弥陀」を参考資料に。



弥陀一尊種子板石塔婆<市指定文化財>

建長 8 年（1256）武蔵七党の一つ丹党の丹治泰家が亡母追善供養のために造立したもので、梵字（キリク）で表した阿弥陀如来が蓮台にのり、その下には観無量寿経の一節「光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨」が刻まれている。また「建長八年二月二十三日」の紀年銘、「丹治泰家敬白」と造立者名が刻まれています。鎌倉時代の特徴をよく示しており、市内では最古のものです。また、高さ 155cm、幅 58cm、厚さ 9cm あり、市内最大の板石塔婆です。



11. 勝光寺

瑞幡山・勝光寺は〔臨済宗妙心寺派〕で弘安元年（1278）に創建された寺で本尊は白衣観音。

開山は建長寺一世石門和尚、開基は北条時宗。その後火災等で衰微したが徳川家康に寺領壱万坪と 20 石の朱印が与えられ諸堂宇が再建されて現在に至る。

また、**狭山三十三観音 5 番札所**になっている。

注：「開基」とは、寺院の創始にあたって必要な経済的支持を与えた者、ないし世俗在家の実力者を指す。

「開山」は寺院を開創した僧侶（すなわち初代住職）。

山門<市指定文化財：建築物>

元禄9年(1696)の建築で、禅宗様式をよく伝えた貴重な建造物です。三間一戸楼門といい、楼門としては最も例の多い型式になります。門の両側にはかつて仁王が安置されていました。正面の棧唐戸の上には、勝光寺の山号「瑞幡山」と書かれた扁額が掲げられています。



本堂<市指定文化財：建築物>

勝光寺本堂は、「京都龍安寺の塔頭の方丈を延宝5年(1677)に移築、行田の宮大工が建築した」との伝承をもちます。現在、本堂は入母屋造の棧瓦葺ですが、この形式は昭和34年(1959)に改められたもので、それ以前は寄棟造の茅葺でした。



建築形式や意匠は、江戸時代初期における京都の臨済宗系寺院の方丈建築の特色をよくあらわし、京都からの移築の可能性をうかがわせます。しかし、建物調査によると、柱間は京間の寸法基準とは異なり、江戸時代の関東間の寸法基準をとっています。また、製作時期が異なると思われるヒノキ柱とケヤキ柱が混在し、ヒノキ柱の多くに新しい材で継ぎ足した根継ぎが見られました。このことから推測すると、この建物は、京都で解体され運びこまれた前身建物の部材を用い、行田の宮大工が関東間として建築したものと考えられます。関東地方では、稀な建築形式を受け継ぐ建造物として大変貴重です。 [所沢市 HP の指定文化財](#) より抜粋

その他、百番四国供養塔 天保6年(1835)、六地藏 昭和51年、地藏 文政9年(1826)がある。

*** 1 参考資料：所沢市域駅名変遷 (新編ところざわ史話より)**



新編ところざわ史話 P100より

武蔵野鉄道(後の池袋線)は地蔵山停車場(現在の西所沢駅)経由、南原(現在のダイエーあたり?)を通過して所沢駅に至る計画だったが、下町(現御幸町)の反対があり現在のルートとなった。

* 2 参考資料：旗本と一夜泊の地

江戸城に入った家康は、関東周辺の支配を固めるため、三河から連れてきた家臣たちを江戸近辺の要所に配置した。主要な街道や河川沿いには上級家臣である大名が、また、江戸から一泊で行き帰りが出来る「一夜泊の地」を旗本の知行地とした。

所沢市域の村々にも、梶氏（所沢村）、宇佐美氏（岩崎村）、武蔵氏（三ヶ島村など）らの旗本が、領主として陣屋を構えるようになった。彼らは、家族や家来を領地に住ませる一方で、自分は勤務の度に江戸を往復するという生活を送った。当時江戸は整備されはじめたばかりで、町としての機能が整っていなかったからだ。やがて江戸の町の建設が進むと、旗本の多くは江戸屋敷を建てて移り、領地の村々には陣屋の存在をうかがわせる地名や墓所などが残された。以下は墓所。

瑞岩寺：岩崎村

宇佐美助右衛門長元（1615 没）岩崎が知行地だったのは初代のみ

久貝（くがい）惣左衛門正信 宇佐美氏の後岩崎を知行

永源寺：久米村

高井助二郎定重：1591 年に 200 石

長久寺：久米村

天正 19 年（1591）中根伝七郎正重が久米のうち 200 石を知行として与えられ幕末まで続いた。正重は伏見城番となったが、伏見でなくなって長久寺に葬られた。

その子、伝七郎正成は出世して 5000 石となった。深川に葬られたが長久寺にも墓を建てた、しかし以後中根氏は長久寺には葬られていない。

無量寺：北野村 花井庄右衛門、屋敷は北野天神社の東

清照寺：山口村 久松氏

勝楽寺：勝楽寺村 小林重正、重宣は勝楽寺に葬られたがそれ以降は代々浅草に葬られた。

なお小林氏の墓は勝楽寺移設の時に他所に移されたか、現在の勝楽寺には見当たらなかった。

妙善院：三ヶ島村 沢吉宗

所沢を知行した家臣の多くは徳川氏に従って関東に移った占領軍であるが、北条氏の家臣も取り立てて懐柔していった。沢吉縄は武蔵の地侍として北条氏に仕え、戦国末期には三ヶ島に居住していたが、北条氏の滅亡後徳川氏に仕えるようになった。吉縄は関ヶ原の戦いに出陣したが、翌年亡くなり妙善院に葬られた。この時沢氏の子供は幼少であったが家臣の中將監が家康に願い出て無事知行 150 石を与えられた。中氏も三ヶ島の土豪であったが、戦国末期に沢氏に仕えた様子。後には三ヶ島の名主となっている。

5 月 24 日のフィールドワークで妙善院から金仙寺に向かう途中の慈眼庵にあった筆子塚は中 伊右衛門の記念碑であった、その他に中家が多くあった様に記憶しています。



所沢市域の領主支配の変遷

ところざわ歴史物語より

| 現地区 | 年代 村名 | 天正 | 慶長 | 正保 | 明暦 | 寛文 | 元禄 | 宝永 | 享保 | 慶応4年頃 | |
|-------|----------|--------------------------|---------------------|--------------------------|-----------------------------------|----------------------|------|------|------|---------------------------------|---------------------------------|
| | | 1590 | 1600 | | | | | 1700 | 1800 | 1868 | |
| 所沢 | 所沢村 | 梶氏 300石 | | 内藤氏 300石 | | 川越藩 | | 幕府代官 | | 1277石余 | |
| | 所沢新田 | | | 幕府代官 200石 | | | | | | | |
| 松井 | 上安松村 | | | 安松村(幕府代官) | | 川越藩 275石 (幕府代官) | | 幕府代官 | | 344石余 | |
| | 下安松村 | | | | | 川越藩 232石 幕府代官 91石 | | 幕府代官 | | 443石余 | |
| | 牛沼村 | | | | | | | | | 222石余 | |
| | 下新井村 | | | 幕府代官 67石余 | | | | | | 270石余 | |
| 小手指 | 上新井村 | | | 幕府代官 96石余 | | | | | | 463石余 | |
| | 北野村 | | | 小林氏 400石 240石 160石 | | | 幕府代官 | | | 240石 189石余 330石 | |
| 吾妻 | 北秋津村 | | | 松風氏 123石余 | | | 幕府代官 | | | 243石余 | |
| | 久米村 | 高井氏 (幕府代官) 竹本氏 (幕府代官) | | 三枝氏 200石 菅沼氏 200石 | | | 幕府代官 | | | 276石余 200石余 182石余 200石 | |
| | 荒幡村 | | | 山田氏 166石 中根氏 200石 | | | | | | 400石余 | |
| | 岩崎村 | 宇佐美氏 | | 久貝氏 276石 | | | | | | 276石余 | |
| 山口 | 堀之内村 | | | 幕府代官 200石 | | | | | | 98石余 | |
| | 町谷村 | 武蔵氏 39石 | | 小林氏 33石 | | | | | | 39石余 30石 103石余 62石余 | |
| | 打越村 | | | 坂部氏 103石 幕府代官 | | | 幕府代官 | | | 89石余 93石余 | |
| | 菩提木村 | | | 向坂氏 幕府代官 | | | | | | 63石余 | |
| | 氷川村 | | | 松風氏 幕府代官 | | | | | | 44石余 | |
| | 川辺村 | | | 長田氏 | | | | | | 103石余 | |
| | 新堀村 | 武蔵氏 | | 久貝氏 | | | | | | 47石余 23石余 81石余 | |
| | 大鐘村 | 武蔵氏 | | | | | | | | 95石余 | |
| | 堀口村 | 久松氏 | | | | | | | | 149石余 | |
| | 勝楽寺村 | 糟屋氏 | | 小林氏 250石 | | | | | | 246石余 | |
| | 三ヶ島 | 三ヶ島村 | 武蔵氏 106石 久松氏 52石 | | (沢氏) 沢氏 165石余 (山田氏) 幕府代官 763石余 | | | | | | 106石余 50石余 151石余 666石余 |
| | | 堀之内村 | | | | 幕府代官 武蔵氏 | | | | | 76石余 166石余 |
| 林村 | | | | | | 幕府代官 | | | | 333石余 | |
| 糎谷村 | | (宮寺町のうち) | | 幕府代官 | | | | | | 517石余 | |
| 柳瀬 | 坂之下村 | (幕府代官) | | 幕府代官 羽田氏 | | | | | | 49石余 77石余 | |
| | 城村 | | | | | | 幕府代官 | | | 69石余 | |
| | 本郷村 | 城本郷村(幕府代官) | | 貴志氏 | | | 幕府代官 | | | 124石余 | |
| | 日比田村 | | | | | | 幕府代官 | | | 33石 | |
| | 亀ヶ谷村 | | | | | 川越藩 | 幕府代官 | | | 174石余 | |
| 富岡 | 南永井村 | | | | | 川越藩 | 幕府代官 | | | 649石余 | |
| | 中富村 | | | | | 川越藩 | | | | 873石余 | |
| | 下富村 | | | | | 川越藩 | | | | 505石余 | |
| | 神谷新田 | | | | | | 幕府代官 | | | 98石余 | |
| | 堀兼新田 | | | | | | 幕府代官 | | | 39石余 | |
| | 久米新田 | | | | | | 幕府代官 | | | 62石余 | |
| | 北田新田 | | | | | | 幕府代官 | | | 228石余 | |
| | 岩岡新田 | | | | | | 幕府代官 | | | 116石余 | |
| | 氷川新田 | | | | | | 幕府代官 | | | 15石余 | |
| | 川辺新田 | | | | | | 幕府代官 | | | 16石余 | |
| 北野新田 | | | | | 幕府代官 | | | | 29石余 | | |
| 中北野新田 | | | | | 幕府代官 | | | | 36石余 | | |

幕府領 旗本領 川越藩領

注) 本表は、寺社領を除外した。ちなみに寺社領は以下のとおり。下安松村長源寺領(10石)、北野村物部神社領(47石余)、上新井村新光寺領(6石)、久米村永源寺領(30石)・八幡社領(5石)、氷川村中氷川社領(4石余)、山口堀之内村勝楽寺社領(20石)・来迎寺領(10石)、堀口村天神社領(5石)、新堀村金乗院領(10石)、勝楽寺村七社神社領(7石)、三ヶ島村中氷川社領(8石余)・愛宕社領(6石余)・湯殿社領(7石余)・妙善院領(11石)・宝玉院領(10石)・常楽院領(7石余)、三ヶ島堀之内村金仙寺領(7石余)

*3 来迎寺にまつわる民話

車返しの弥陀

その昔、藤原秀衡(ひでひら)は奥州に城を構え、奥州一帯に勢力を持っていて、どの戦いにもまけたことはありません。これは秀衡が運慶という名人の作った弥陀三尊を守り本尊として、日夜拝んでいるご利益です。このことを聞いた將軍源 頼朝は弥陀三尊が欲しくて、何度も使いを出しました。

秀衡は惜しいとおもいましたが、頼朝の頼みとあつて贈ることに決めました。そこで立派な厨子に納め、車にのせ鎌倉へ向け出発させました。長い旅をしてようやく府中の近くまできたとき、急に車が重くなって押しでも引いても動かなくなりました。そこで、使いのものが鎌倉に急ぎ、頼朝にこのことを伝える と、「やむを得ないから、奥州に送り返すように」とのことなので、帰って車の向きを変えました。すると車は軽々と動き始めました。そこでこの地を車返村(くるまがえしむら・現府中市)と呼ぶようになりました。

話は変わって、その頃一人の旅僧が山口堀の内村の小さなお堂で座禅をくんでいました。ある夜のこと、弥陀三尊が現われ、「私は今、府中車返村にいるが、永く おまえの禅室に住もうと思うから、迎えにくるように」といって南へ向かって飛び去りました。翌朝、さっそく府中に行き車返村をたずねても、だれも村の名を 知る人がいません。すると、一人の老人が奥州に返る阿弥陀様の話をしてくれました。そこで、秀衡の従者たちのいる宿へ行き、夢の話をしますと、その不思議 さに驚き、阿弥陀様を坊さんに渡してくれました。堀の内村へ帰った僧はこれを草ぶきのお堂にまつりました。 来迎寺にまつられた弥陀三尊は「車返しの弥陀」として、参詣に来る人があとをたたなかつたということです。

【ところざわ倶楽部 HP より 仲山さん投稿】

行脚の弥陀

昔、山口堀之内村に、阿弥陀如来を厚く信仰している老夫婦がいました。ある晩のこと、この村にある来迎寺の阿弥陀様を一心に拝んでいると、コトコトと戸をたたく音がします。出てみると「行き暮れて困っている行脚僧ですが、一夜の宿をお頼みします」というあいさつです。

はて、どこかで見たことのある人と思いながらこころよく宿をかしてあげました。

そして、おばあさんがよく見ると、このお坊さんは、来迎寺の阿弥陀様と同じ「笹の葉の模様が細かくついている金色の衣」をつけています。なお注意して見ると、その顔かたちまで阿弥陀様にそっくりで、お供の僧までいつも両側にいる菩薩によく似ています。そこで老夫婦は、ことによると信仰に厚いのを知って、まことの阿弥陀様がおいでになったのではあるまいかと、心をこめておもてなしをし、翌朝早くお帰しました。

帰る前、おばあさんは何か見覚えにとおぼえて、衣の裾に紅を少しつけておきました。そして、来迎寺に拝みに行つたところ、衣の裾に紅がついているので驚いた老夫婦は、このことを和尚さんに話しました。和尚さんは「阿弥陀様に行脚をさせるのはもったいない」と言つて、お堂の前に残っていた弥陀三尊の足跡に「これからは行脚をなさらないように」と、足封じの「まじない」をしました。それから後、この阿弥陀様は再び行脚をすることがなくなったとのこと。驚いた夫婦は、このことを来迎寺の和尚に話すと、和尚はこの上阿弥陀様に行脚をおさせするのはもったいないといつて、ちょうど、お堂の前に残っていた三尊の御足跡に「これからは行脚をなさらないように」といって、足止めのまじないをしました。

それからは阿弥陀様も行脚することがなくなったということです。

【ところざわ倶楽部 HP より 仲山さん投稿】